



大森朔衛 「オーヴェルの家」



里見 淳「東京駅」

(会員)
秋山功
伊東總吉
宇都宮義文
太田貞雄
佐藤裕幸
鈴木忠男
鈴木正道
野原宏
福井豊
堀良慶
和田孝明

(敬称略・50音順)

NPO法人あーと・わの会 通称：「わの会」

第46回放談会



2016年7月29日(金) 13時～15時
於 東京・京橋区民会館 洋室5号室

第46回放談会

1. 日時 2016年7月29日(金) 13時~15時
2. 場所 東京・京橋区民会館 洋室5号室
3. 出席者(計11名 敬称略:50音順)
<会 員> 秋山功 伊東總吉 宇都宮義文 太田貞雄 佐藤裕幸 鈴木忠男
鈴木正道 野原宏 福井豊 堀良慶 和田孝明
4. 司会進行:佐藤裕幸 書記:鈴木忠男 写真:太田貞雄 編集制作:野口勉
5. 放談会(順不同)

① 鈴木正道



大沢昌助

「はねあがる」 シルクスクリーン・紙
11.5×11.5cm 制作年:1982年
私が定年のとき、もらったもの。
大沢作品でミニアチュールは少ないが、非常にユーモアがあり好きな作品。
はねあがったものは鯨、それともイルカか。



二見彰一

「弦楽器・蔵書票」 エッチング・アクアチント
5.5×7.0cm 9.5×7.0cm
制作年:不詳(多分2013年以前)
家内の病氣見舞として、二見氏より贈られたもの。
「弦楽器」(無題)は、氏が大のクラシックファンのため、なかなか気の効いた作品。「蔵書票」はS. Koeda氏(不明)から頼まれたもの。私にはこんな票をつける本はない。
二見氏はミニチュア作品の名手。ふつうの作品より、いいという人もいる。

日本人は小品が上手いということは、江戸時代からの根付を作る技術に相通ずるものがあるように思う。

版画集として「ミクロドラマ」(1971)、「イン・ザ・ナイト」(1974)、「ヨーロッパからのたより」(1976)、「コーヒー・クインテット」(1979)、「北欧幻想」(1982)、「海から」(1989)、「お茶のひととき」(1994)、「八十重吉の十一の詩」(2011)、「立原道造、丸山薫他」(2013)

<談>鈴木:二見は60点、大沢は20点のコレクションがあります。

② 鈴木忠男



小田さゆり

「鎮魂歌 - 天使の回廊」 パステル・紙
31.0×20.3 cm 制作年：不詳

当時2点買い、1点は現在「私の愛する一点展」(梅野記念絵画館)に展示されています。先日7月24日(日)にバスツアーで行ってきましたが小さく見えました。なぜこちらを選んだかということ、今回持ってきた方が汚く見えたのでした。しかし再度よく見てみると、わざとした剥落部分や重ね厚塗り部分が技術的にこちらの方が優れていると見ました。少女顔の天使です。

1967年山口県生まれ。90年武蔵野美術大学卒、主体美術協会佳作賞。92年会員推挙。01年退会。99年結婚、サユリ・ギビアン(米国籍)として柴田悦子画廊(銀座)で個展。当時ニューヨーク在住。

<談>鈴木：米国に行ってから情報がなく、既に画家活動はしていないと思います。

③ 宇都宮義文



坂井範一(1899~1981年)

「桜島」油彩・キャンバス 6号 制作年：不詳

某ギャラリーの「歳末正札市展、現金掛売御免!!」を覗いていたら、床面スレスレの絵が「チョイト、チョイトそこのお兄さん!」と声をかけてきたので腰痛の腰をいたわりながら、しゃがみこんで絵を眺めた。

「買った!。ところでオヤジサン、ヒトケタ間違ってるんでは?」と言うと、オヤジ、ニヤリと笑って「間違っていないヨ」。初めて識った作家名だったが、そんなことはどうでも良い。絵が良かったのである。<ホントは値段が良かった!> マ、古道具屋で額縁を買ったところ「絵」があった!というところかな。桜島は、好きな火山である。

「なにゆえ放談会に持ち込んだのであるのか!」佐々木征氏が見てみたいとのことだったので。ホンモノ期待!

明治32年岐阜県生まれ、大正15年東京美術学校図画師範科卒、第7回帝展初入選、昭和15年新制作派協会会員、昭和24年岐阜大学教授、昭和56年没82歳。

<談>宇都宮：ありゃま!佐々木さんが来てないよ。

④ 佐藤裕幸



辻 永（ひさし）（1884～1974年）「山羊のいる風景」 油彩・板4号
制作年：不詳

明治後期から大正期にかけて山羊をモチーフに多数制作し「山羊の画家」といわれた。1920年渡欧後は風景画家となり、戦後は日展の中心的存在となり「日展の法王」と呼ばれるようになった。白馬会、文展、帝展、日展と官展系の王道を歩んだ。

<談>佐藤：近所に山羊牧場があり、山羊の絵を描くようになったとか。師・岡田三郎助宅近所（恵比寿）に住み、亡くなってからはそこへ住んだ。次男の朗（ほがらか）に辻の絵を2点見せに恵比寿に行ったことがある。

⑤ 太田貞雄

大森朔衛（1919～2001年）



「オーヴェルの家」油彩・キャンバス F10号



「シャルトル」油彩・キャンバス F6号



「ノートルダム」油彩・キャンバス F4号

前回4月の放談会で、大森朔衛の娘さんの利佳さんが来て、作品の説明と画集・大森朔衛美術館の解説をしてくださった。

その時の図録の絵に魅力を感じ、インターネットを検索したところ「オーヴェルの家」を見つけ、早速購入した。その後、富山の画商より2点購入した次第である。なかなか市場に出ない絵であるため、一期一会の縁を感じる。

1919年高松市生まれ、1938年日本美術学校入学、1940年独立展初入選、1950年モダンアート創立会員に参加、1959年行動美術協会会員、1968年渡仏、サン・ルイ島に住む、1970年帰国、1980年武蔵野美大教授、2001年没

⑥ 福井豊



ポール・エミール・ベカ（仏1885～1960年） Paul Emile Becat
「接吻」Les Baisers（版画集12葉） リトグラフ（部分的に手彩色）・紙
26.0×20.0cm（紙サイズ） 制作年：1947年（パリ刊・エディション不明）

クロード・ジョセフ・ドラ（1734～1780年）の詩に寄せて、ロマンティックだがエロティックな接吻をテーマに神話物語風に描いた耽美的な版画集。第二次大戦後とは思えぬ手慣れたロココ調の古典的作風人物裸体描写である。画家の版画の他作品を検索すると、より過激なポルノ作品も描いている。国内の古書店カタログより数年前購入。（略歴）パリのエコール・デ・ボザールに学ぶ。1913年サロン初入選、1920年ローマ賞、コンゴ、ガボン、スーダンを旅行。近代フランス文豪の肖像画を描いて知られる。1933年以降よりエロティックな版画や挿絵の制作を開始。パリで没。

<談>鈴木（忠）：挿絵本があり、その別刷シート版ではないかと思います。

⑦ 堀良慶



末松正樹（1908～1997年）

「群舞」 鉛筆・デッサン 紙
23.0×30.0cm
制作年：1945年

この作品はフランスの俘虜時代に描かれた作品です。末松は若き日に舞踊に憧れ、日本の舞踊を紹介する一行の一員として渡欧し、第二次大戦の勃発に遭う。多くの日本人が帰国するなか、マルセイユの領事館に職を得て、ドイツ占領下のフランスで過ごした。大戦末期、スペインに脱出を図るが、国境近くの町ペルピニャンで捕まり俘虜になる。この俘虜時代に、踊る人の群像を繰り返し描き、それが次第に抽象化されていった。この画は具象から抽象化過程の作品と思われます。

（略歴）新潟県新発田町に生れる。新潟中学校、宮崎中学校を経て山口高等学校で学ぶ。1936年アヴァンギャルド芸術家クラブに参加。絵を描きながらドイツの舞踊運動であったノイエ・タンツに関心を抱き1939年渡欧。1946年帰国、1947年自由美術協会に参加、1965年より主体美術協会に出品。1969年学園紛争時の多摩美術大学で学長代行をつとめる。1991年新潟市美術館、1992年板橋区立美術館で回顧展。日本の代表的抽象作家。

<談>堀：油彩画を1点欲しい。

⑧ 野原宏



作者不詳

「横たわる裸婦」（仮題） 油彩・キャンバス 12号 制作年：不詳

<談> 皆さんから梅原龍三郎、熊岡美彦、田口省吾等の名が挙がりました。

野原：G川船の「夏期正札市」で購入した作品（DM掲載）を今日取りに行き持ってきた。

⑨ 和田孝明



小牧源太郎（1906～1989年）

「阿阿阿の阿阿阿」 油彩・キャンバス F3号 制作年：1973年

京都生まれ。1933年立命館大学卒、1935年独立美術京都研究所に学ぶ。1937年第7回独立美術展に初入選、1939年美術文化協会創立に参加する。1947年奈良本辰也のマルキシズム研究会に参加。1957年訪伯し、サンパウロ近代美術館で個展。1961年国画会会員となり仏画的主題から土俗信仰にモチーフを得た作品を発表。1985年回顧展、1996年遺作展。日本におけるシュール・レアリスムのパイオニア的展開者であった作者は「初期シュール・レアリスム時期」を経て「仏画的時代」「民族学的時代」と移っていく。初期の夢や幻想などの個人的表象世界から俗神や神話、そして民話などの集団の表象への展開は、より根源的な人間存在の解明を求める途上であったといえる。これらの背景には、作者の仏教哲学や精神分析学の研究が手助けとなっている。

⑩ 秋山功



里見 弴（とん）（1883～1983年）
「東京駅」 油彩・キャンバス 33.5×24.5cm
制作年：不詳

今回は、珍品を紹介したい。
作者は里見弴（さとみ・とん）である。
言わずと知れた白樺派を代表する作家である。
最初にこの作品と出会ったとき、「里見が絵を描くのか？」と一瞬思ったが、考えてみれば里見の兄たちは作家の有島武郎であり、画家の有島生馬で芸術家兄弟として知られている。
また白樺派には、岸田劉生や梅原龍三郎、中川一政など、錚々たる画家たちが集まり、中心メンバーの

武者小路実篤は小説家としてだけではなく画家としても多くの作品を遺したことで知られている。お互いが切磋琢磨し、影響を受けながら、里見自身も絵を描いたとしても不思議ではない。本作品「東京駅」は、その描写力といい、色彩感覚を見ると並みの画家の域を超えている。里見の年譜を調べてみたら、バーナードリーチにエッチングを習うとあった。理想と友情を求め、人間賛歌の作品を生み出した白樺派の作家たちにとっては、小説も画も区別なく創作したのかもしれない。

（略歴）横浜生まれ。代表作には「多情沸心」「極楽とんぼ」など。菊池寛賞、読売文学賞、文化勲章、最晩年に書画集「垣のそき」を発売している。

<談>鈴木（忠）：恩地孝四郎の版画「東京駅」にそっくりですといったけれど、調べたらこちらの方は昭和20年（戦後）であり、里見の絵は戦前だ。

⑪ 伊東總吉

三栖右嗣（1927～2010年）
「K子」リトグラフ・アルシュ紙
62.0×47.0cm E. A
制作年：1978年



評者（桑原住雄）は、「スケッチ風の素早い瞬間的なとらえ方を爽快にみせる人物の連作は三栖の技術の精確さを堪能させてくれるものであるが、モデルの心の状態まで描きとってしまう彼の眼に私は興味を覚える。」と述べているが、本作は画家の定評ある写実力が十分発揮された佳作と思います。

（「版画事典」室伏哲郎著1985 P681 日本人作家紹介 定評のある写実力はリトでもフルに発揮され、明快なうつつの夢幻世界を啓示する。）

参考資料：「版画芸術」1979. 4, 1 P164～167
「三栖右嗣のリトグラフ」桑原住雄

作品記事は、各自が当日提出した紹介文を基に掲載しています。

○次回放談会は平成28年10月に実施予定です。

こちらは、第11回「わの会」コレクション展のスナップです。 H28. 8. 21 (日)



東京・品川区民ギャラリーでの展示風景



出品者による作品紹介



講演「美術よもやま話」
現代美術センター主宰 笹木繁男氏

発行：NPO法人あーと・わの会 通称「わの会」
発行日：平成28年8月吉日
編集：実行委員
佐藤裕幸（司会進行） 鈴木忠男（書記） 太田貞雄（写真）
野口勉（編集制作）

連絡先：事務局 〒277-0871 柏市若柴1-358 堀良慶
TEL 04-7134-8293 ryokeihori@yahoo.co.jp

発行部数：80部